

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言の研究法：体系と多様性をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三井, はるみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002978

方言の研究法 —体系と多様性をめぐって—

三井 はるみ

1. はじめに

本発表では、「組織内でなされたプロジェクトを中心にして、これまでに得られた成果を紹介する」というミッションのもと、文法事象に関する全国分布図である、国立国語研究所編（1989-2006）『方言文法全国地図』を取り上げ、方言文法の「体系の多様性」を捉える研究の方向を探ってみたい。

なお、『方言文法全国地図』の全体像については、「特集：地図に見る方言文法」（『月刊言語』35-12, 2006.12）, 『方言文法全国地図をめぐって』（『日本語学』26-11, 2007.9）に行き届いた解説があり、この地図集を資料とした様々な角度からのケーススタディも行われている。

2. 言語地図との関わりから見た、方言研究の対象と方法

方言研究の方法論・目的は、一方言を対象とした記述研究、複数の方言を扱う対照研究・類型論的研究、方言と中央語（あるいは複数の方言）の比較・対照による言語変化研究、方言内の変異を量的な傾向によって捉えるバリエーション研究、地理的分布を分析の手がかりとする言語地理学的研究等、多岐にわたる。

『方言文法全国地図』などの言語地図をツールとして用いる研究として代表的なのは、言語形式の地理的分布を分析の手がかりとする言語変化研究（狭義の言語地理学的研究）である。しかし言語地図は、このような研究だけにしか利用できないわけではない。複数の言語的特徴を地理的に俯瞰できる資料として、記述研究、対照研究・類型論的研究、言語変化研究いずれにも、手がかりや糸口を与えうる。

一方で、意味のバリエーションをきめ細かく捉えるには、言語形式の地理的分布相を俯瞰することを第一目的とする言語地図だけでは、十分ではないことがままある。その場合は、ターゲットとする事象について、要地にあたる方言を選び、分析枠を設定し、必要な観点を網羅した詳細な調査を行う必要がある。

以下では、『方言文法全国地図』に収載されている表現領域から、条件表現（のうちの順接仮定条件表現）を取り上げ、類型論的研究、言語変化研究へ至る過程として、(1) 全国における分布状況の把握、(2) 特定方言での体系記述の試み、を行ってみたい。実際には、方言の文法体系の多様性の一端を見てみる、ということになるだろう。

なお、方言研究の対象である方言には、記号システム（言語）としての側面と、社会的存在としての側面がある。このことは本来、方言に限らず言語一般に言えることであるが、日本語（共通語）に比べると、日本語方言は、その言語的状态（例：共通語化）も社会的位置づけ・役割（例：方言矯正、方言コンプレックス、アクセサリー化）も、社会の動向に目に見えて強く影響を受

けている（このことが、方言学への社会言語学的な研究法の積極的な取り入れにつながったと考えられる）。また、社会的存在としての方言は、影響を受けるばかりではなく、地域を初めとする社会に貢献する存在でもある（例：医療・福祉）。

また、言語の分野で見ると、音韻・文法を中心に言語研究としての研究が進み、語彙については、現実を反映した開かれた体系であることから、背後にある地域文化や民俗との関連も重視されてきた。

このようなことから、言語生活の研究というと、まずは、方言の社会的存在としての側面に思いが至るのではないだろうか。その意味でいうと、本発表が扱うのは、方言研究の中でも言語生活研究的色合いの比較的薄い分野ということになるかもしれない。

3. 条件表現とは

複文の中で、後件の成立について前件が何らかの関係で条件となっていることを表す表現を条件表現という。

条件表現は、一方では、できごとを仮定的に予想しているのか（仮定）、実際に起こったできごとについて述べているのか（事実、確定）に分かれ、他方で、順当に予想される結果が起こった場合（順接）と、そうでない場合（逆接）に分かれて、全体として、次のような四つに分類されるのが一般的である。

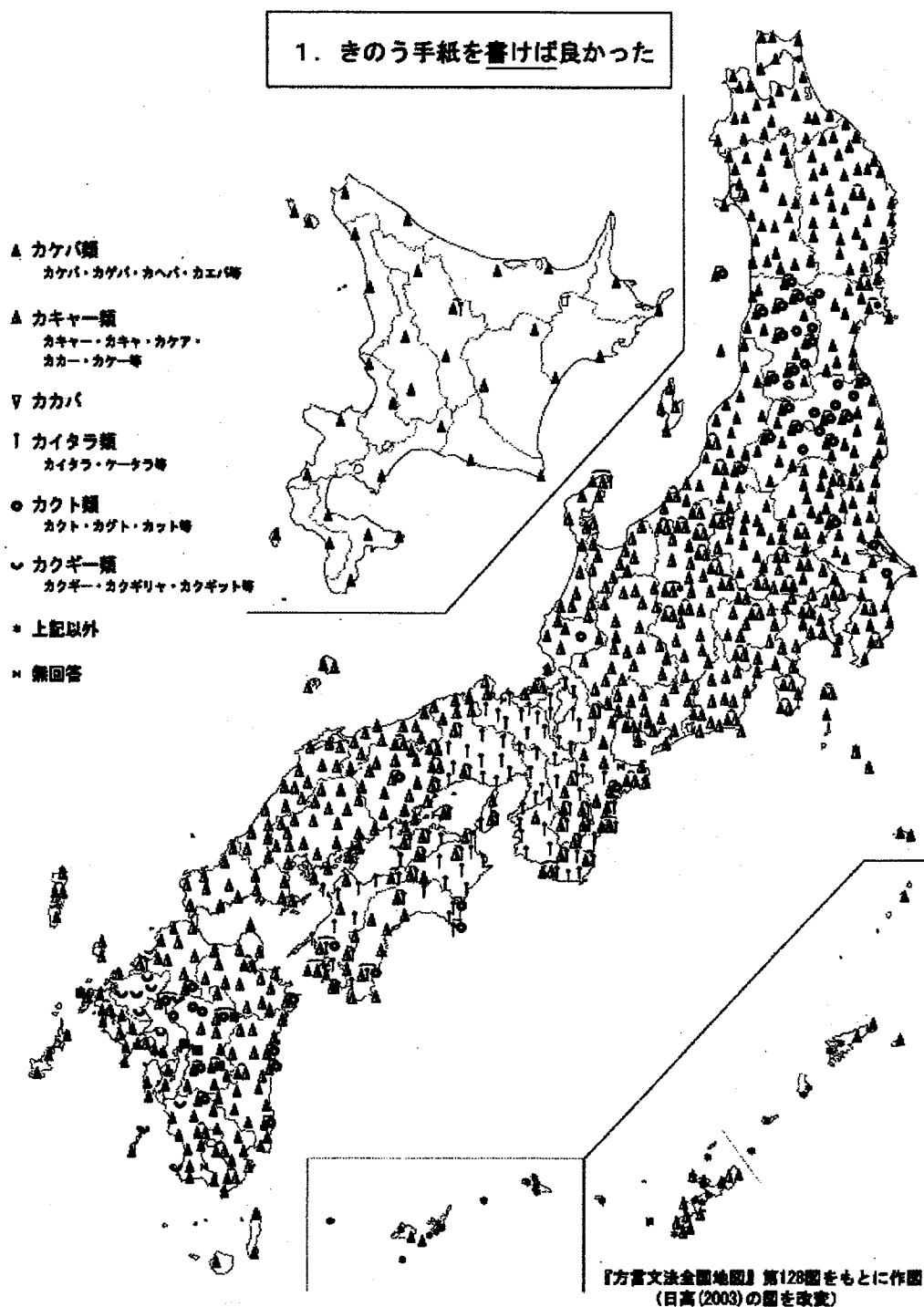
	仮 定	事 実（確定）
順接	努力すればできるようになる	努力したからできるようになった
逆接	努力してもできるようにならない	努力したのにできるようにならなかった

ここではこの4分類のうち、「順接仮定」の部分に焦点をあてる。共通語では、「ば」「たら」「と」「なら」が、順接の仮定条件文を構成する代表的な形式である。

以下では まず、方言の中で条件表現のバリエーションがどの程度、どのように存在するのか、ということを、『方言文法全国地図』によって概観する。次にそこから、共通語と異なる体系を持つと予想される方言を二つ取り上げ、共通語と対照しながら、その体系のありようを探る。最後に、方言の条件表現の体系のありようについて、きわめて大まかな見通しを述べてみたい。

4. 仮定条件表現形式の地域差

『方言文法全国地図』には、順接仮定条件に関して、21項目の地図が収められており、前接の品詞・動詞の活用の種類・肯否といった形態的な面と、仮定の意味や構文（前件と後件の関係、主節のモダリティ）等による違いを、ある程度カバーしている。ここでは7枚の地図によって、全国的な地理的変異の様相を概観する。各図について語形を統合した略図を示し、それぞれに見られる語形と分布の状況を簡単に説明する。ただし琉球方言には、ほとんど言及することができない。



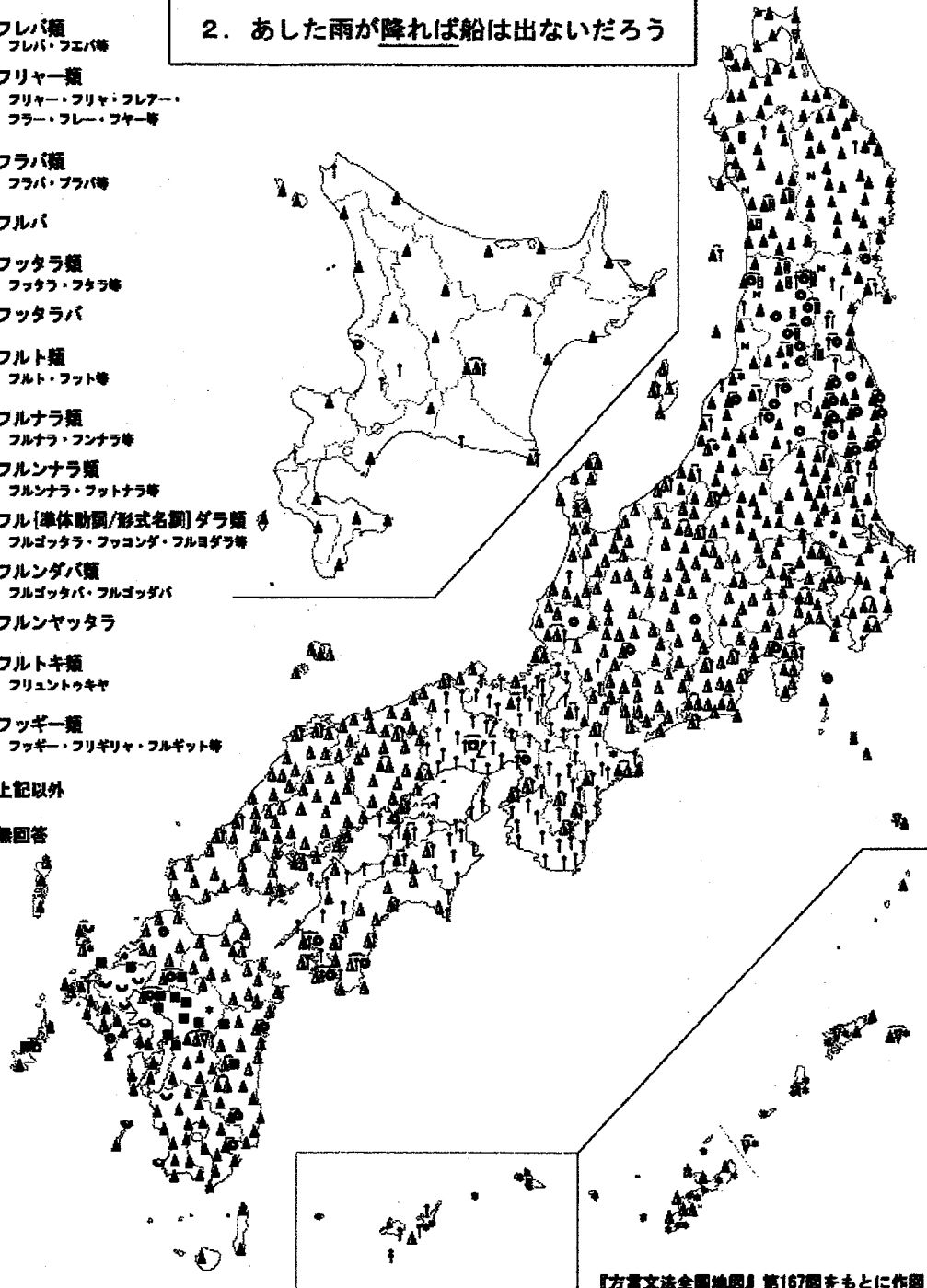
(1) 128 図「きのう手紙を書けばよかった」(反事実条件文・慣用的表現)

前件は発話時点で成立しなかったことが確定している事態で、それが仮に成立していたと仮定し、後件でそれに対する評価を述べる文。反事実的条件文だが、慣用的な表現でもある。

「カケバ」は東北から関東東部にかけてと九州南西部に分布し、また、その融合形である「カキヤー」が中部地方と中国・四国南西部・九州北東部に分布、そして、近畿から四国北東部にかけて「フッタラ」が分布する、という典型的な周圈的分布が認められる。また、南東北の山形県・福島県には、「フルト」が、「フレバ」と併用が多いながら、集中的に分布している。

- ▲ フレバ類
フレバ・フエバ等
- ▲ フリヤー類
フリヤー・フリヤ・フレアー・
フラー・フレー・フヤー等
- ▽ フラバ類
フラバ・フラバ等
- ▽ フルバ
- ↑ フツタラ類
フツタラ・フタラ等
- ↑ フツタラバ
- フルト類
フルト・フット等
- フルナラ類
フルナラ・フンナラ等
- フルンナラ類
フルンナラ・フットナラ等
- フル〔準体助詞/形式名詞〕ダラ類
フルゴツタラ・フツコンダ・フルヨダラ等
- フルンダバ類
フルゴツタバ・フルゴツダバ
- ∠ フルンヤツタラ
- フルトキ類
フリュントッキヤ
- ∪ フツギー類
フツギー・フリギリヤ・フルギット等
- ・ 上記以外
- ・ 無回答

2. あした雨が降れば船は出ないだろう

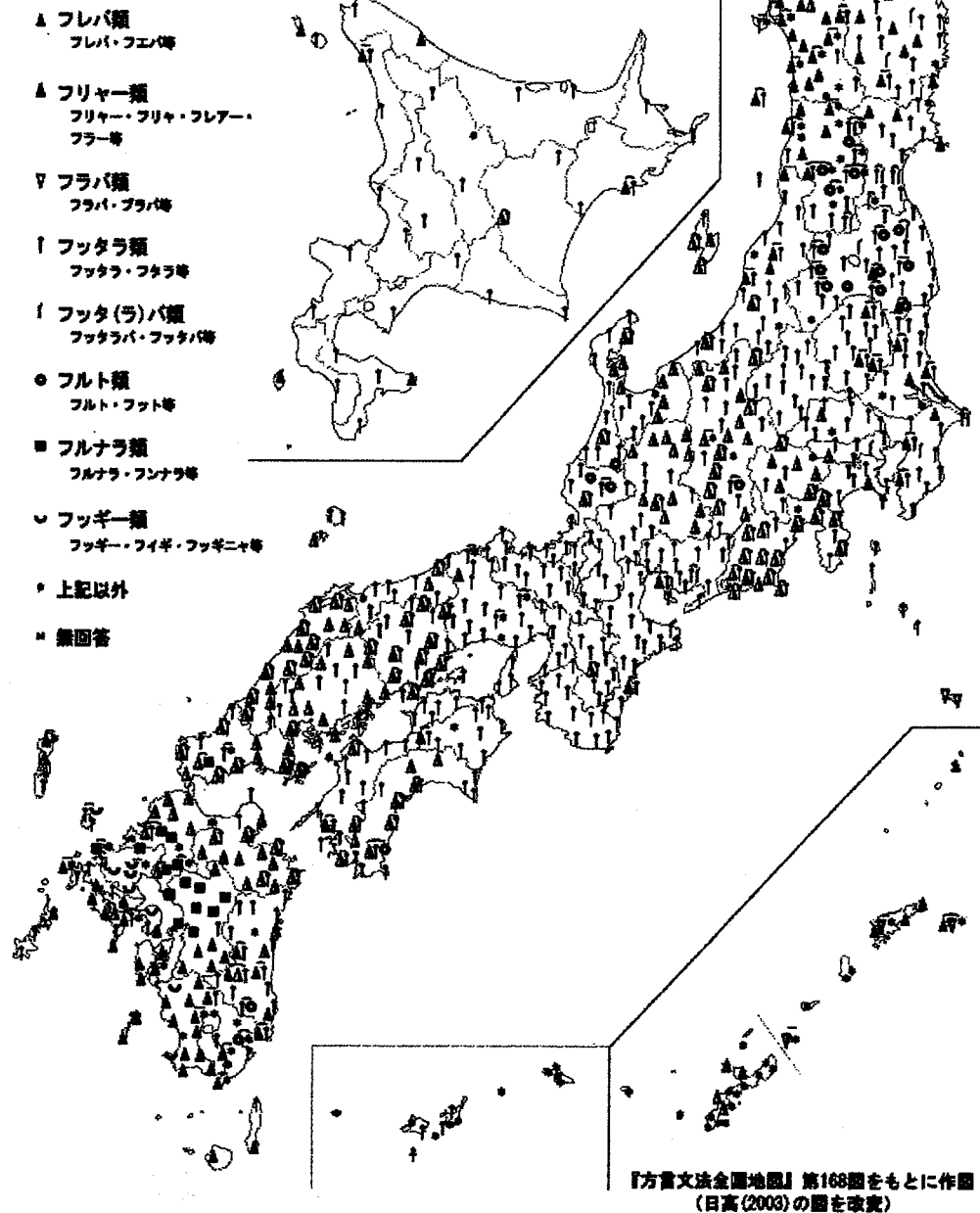


『方言文法全国地図』第167図をもとに作図
(日高(2003)の図を改変)

(2) 167 図「あした雨が降れば船は出ないだろう」(仮定条件文・後件：推量表現)

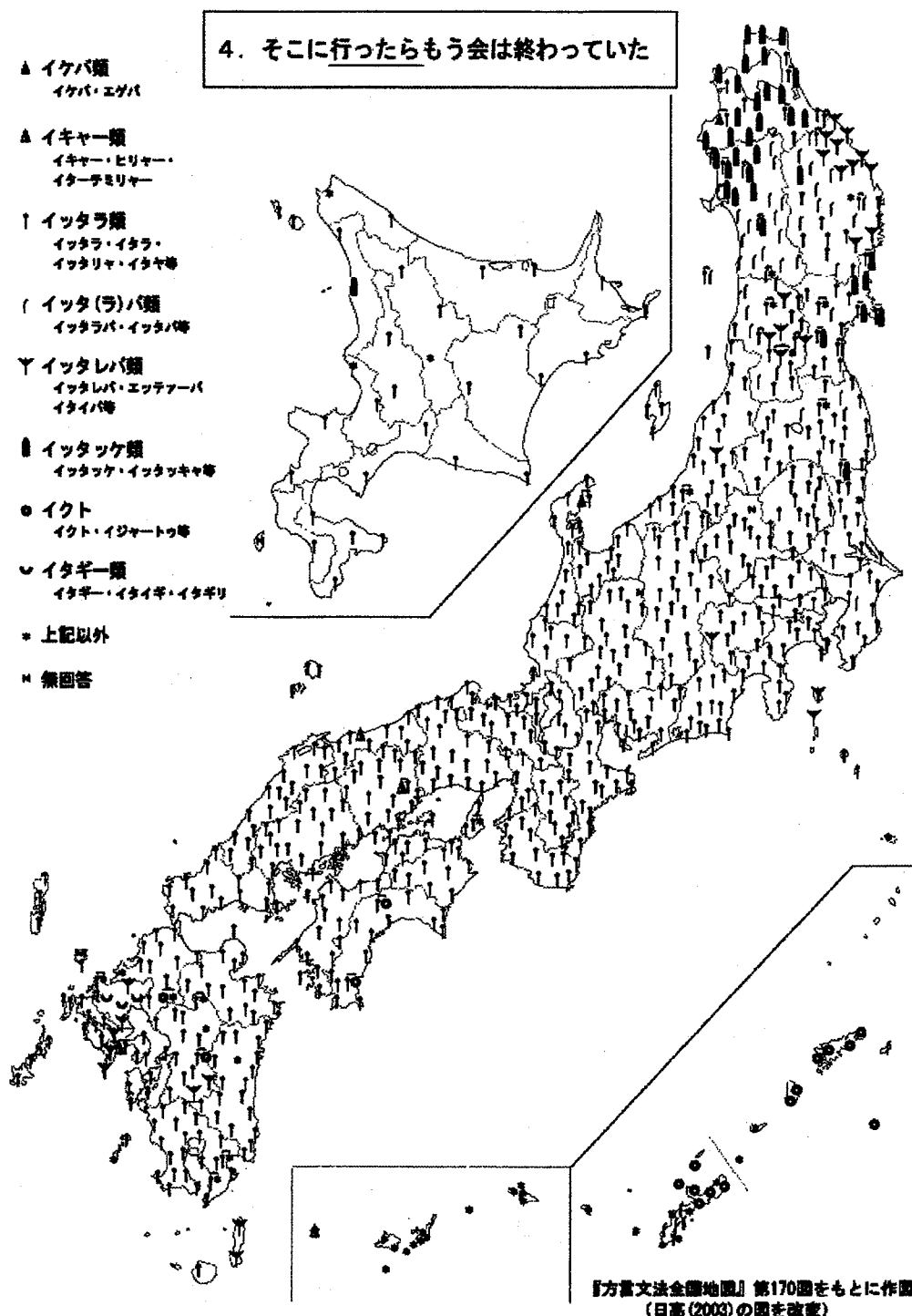
前件の事態が未来において成立した場合を仮定し、後件でそれに伴って生じる事態を述べている仮定条件の文で、主節末は推量表現。『方言文法全国地図』の項目の中では、典型的な仮定条件文である。この図の分布状況は、先ほどの仮定条件の「降れば」の地図とおおむね一致する。

3. 雨が降ったらおれは行かない



(3) 168 図「あした雨が降ったらおれは行かない」(仮定条件文・後件：意志表現)

前件の事態が未来において成立した場合を仮定し、後件でそれに伴って生じる事態を述べている仮定条件の文で、主節末は意志表現。167 図「降れば」と同じ仮定条件の文だが、「たら」を用いた調査文を提示している。167 図「降れば」と比べると、「タラ」を用いる地域が広がり、「フレバ」「フリヤー」「フルト」などと併用されながら、ほぼ本土全体にわたっている点が注目される。ただし、東北北部と九州南西部などには「タラ」がほとんど浸透していない地域がある。「フレバ」「フリヤー」「フルト」の分布地域は、「降れば」の地図とおおむね同様である。



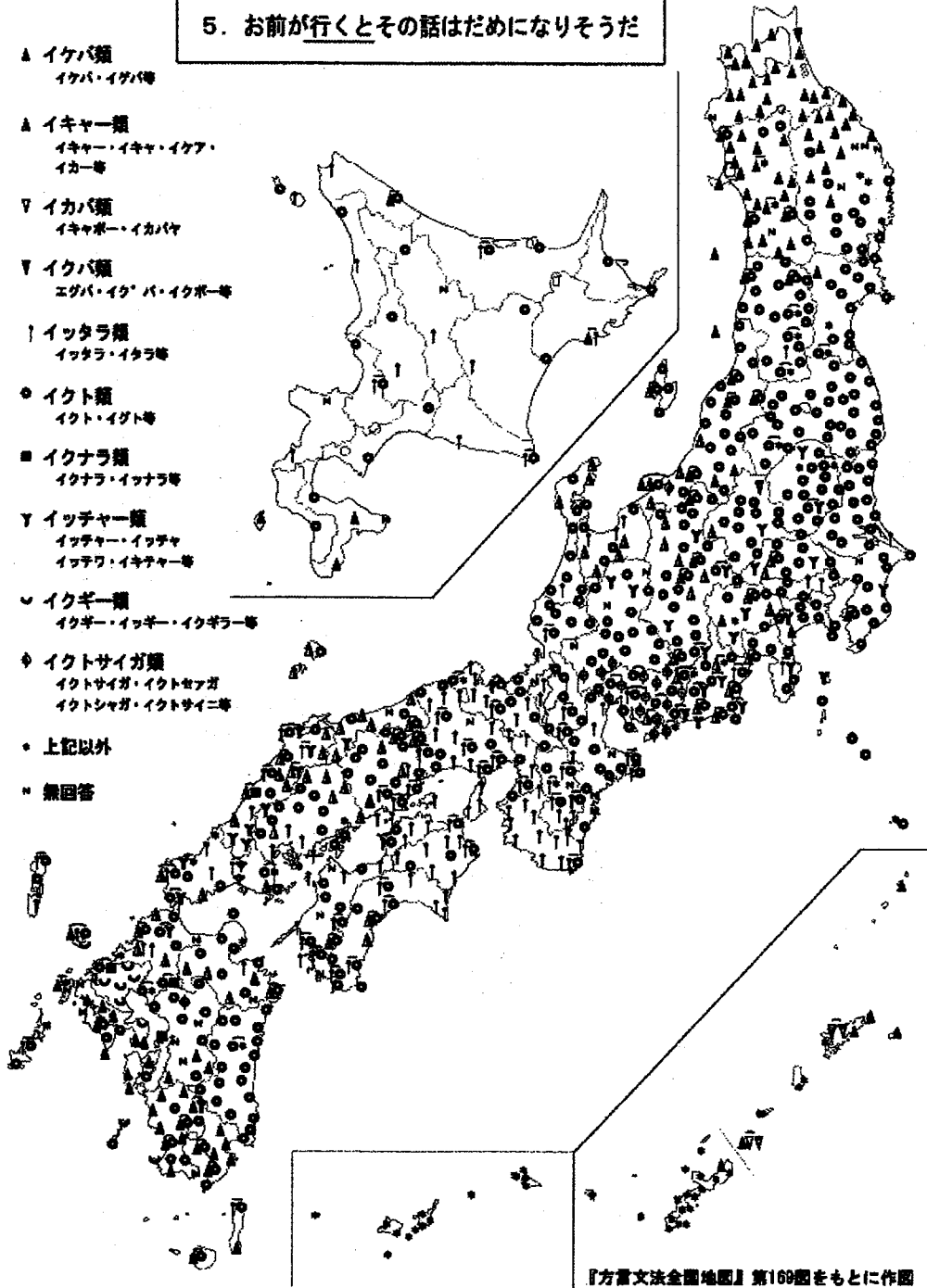
(4) 170 図「そこに行ったらもう会は終わっていた」(事実的用法・継起)

168 図「降ったら」と同じく「たら」による調査文だが、すでに成立した1回のなできごとを表す、事実的用法である。東北北部を除いて、全国的にほぼ「イッタラ」のみが分布している。東北北部に分布するのは、「イッタツケ類」「イッタバ類」で、いずれも仮定条件文の「降ったら」の地図にはほとんど現れておらず、事実的用法専用の形式である。

また、「已然形+バ」にあたる「イッタレバ」(東北と九州南西部)およびその融合形「イッタリヤ」(九州南西部)が見られる。この形は168 図「降ったら」(仮定条件)には現れない。日本語史上、仮定条件の「たら」は、「たらば」の「ば」が脱落して生じ、事実的用法の「たら」は、「たれば」が「たりや」を経て生じた、とされる推移と対応する分布である。

5. お前が行くとその話はだめになりそうだ

- ▲ イケバ類
イケバ・イクバ等
- ▲ イキヤー類
イキヤー・イキヤ・イクア・
イカー等
- ▽ イカバ類
イキヤホー・イカバヤ
- ▽ イクバ類
エグバ・イク' バ・イクホー等
- ┆ イッタラ類
イッタラ・イクラ等
- イクト類
イクト・イクト等
- イクナラ類
イクナラ・イクナラ等
- Y イツチャー類
イツチャー・イツチャ
イツチワ・イキチャー等
- ∨ イクギー類
イクギー・イツギー・イクギラー等
- ◆ イクトサイガ類
イクトサイガ・イクトセアガ
イクトシマガ・イクトサイニ等
- 上記以外
- 無回答



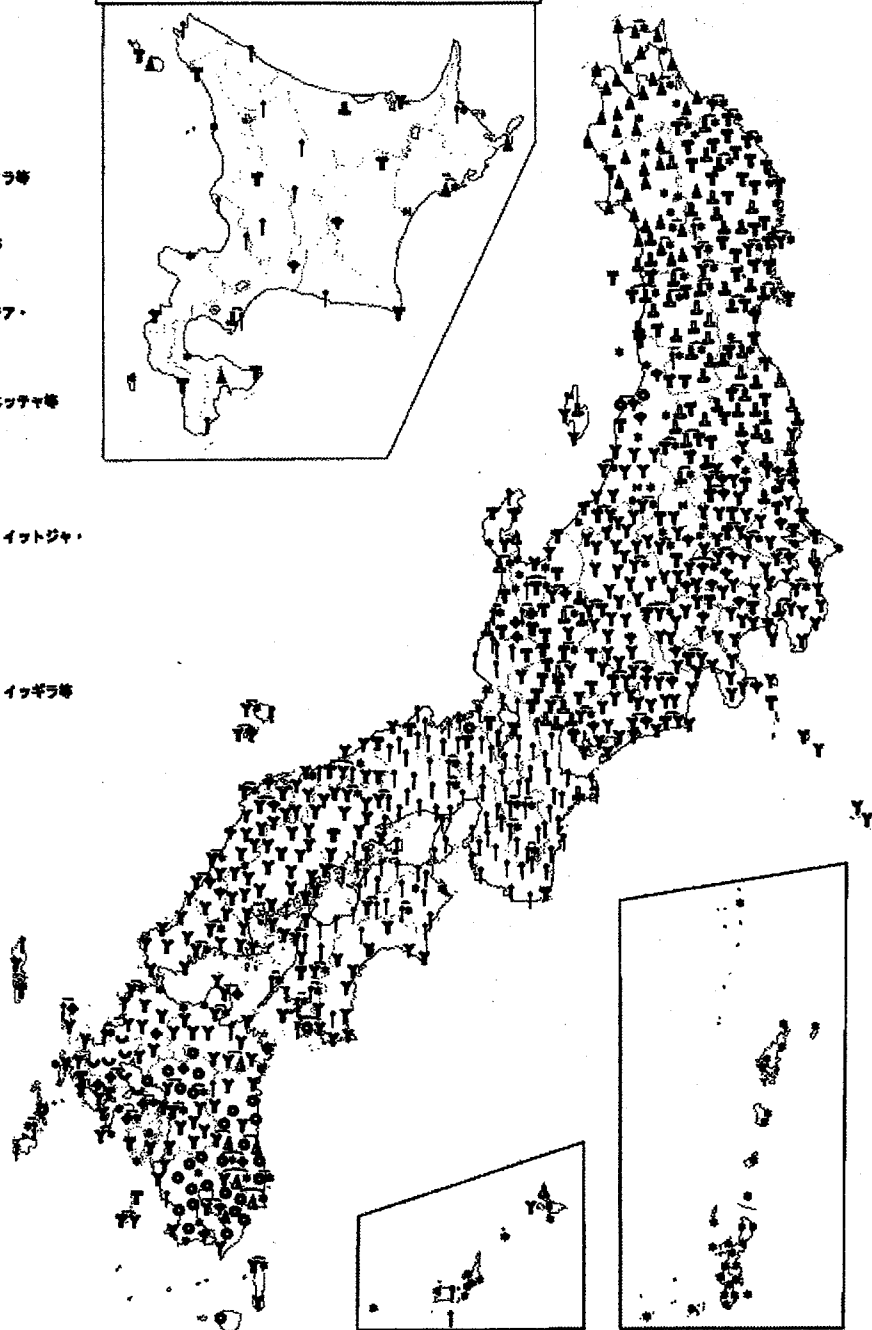
『方言文法全国地図』第169図をもとに作図
(日高(2003)の図を改変)

(5) 169 図「おまえが行くとその話はだめになりそうだ」(仮定条件文・後件：悪い結果)

仮定条件文で、後件が話し手にとって望ましくない事態と捉えられる内容の文。全国的に「イクト」が分布する中で、東北北部と九州南西部には「イケバ」が見られる。また、近畿から四国 北東部にかけては、「イクト」との併用が多いが、「イッタラ」がまとまって分布している。

6. そっちへ行ってはいけない

- ▲ イケバ類
イケバ・エダバ等
- ▲ イキヤー類
イキヤー・イキヤ
- ↑ イッタラ類
イッタラ・イタラ・エキタラ等
- イクト類
イクト・イクト・イット等
- ↑ イッテワ類
イッテワ・イテワ・エッテワ・
エッテワ等
- ↑ イッチャー類
イッチャー・イッチャ・エッチャ等
- ↓ イッテ類
イッテ・エッテ・エテ等
- ▼ イクンジャ類
イクンジャ・イクジャ・イットジャ・
イクンデ等
- ◆ イクコトワ類
イクコトワ・イッコタ等
- ▽ イクギー類
イクギー・イクギニー・イッギラ等
- ＊ 上記以外
- 無回答



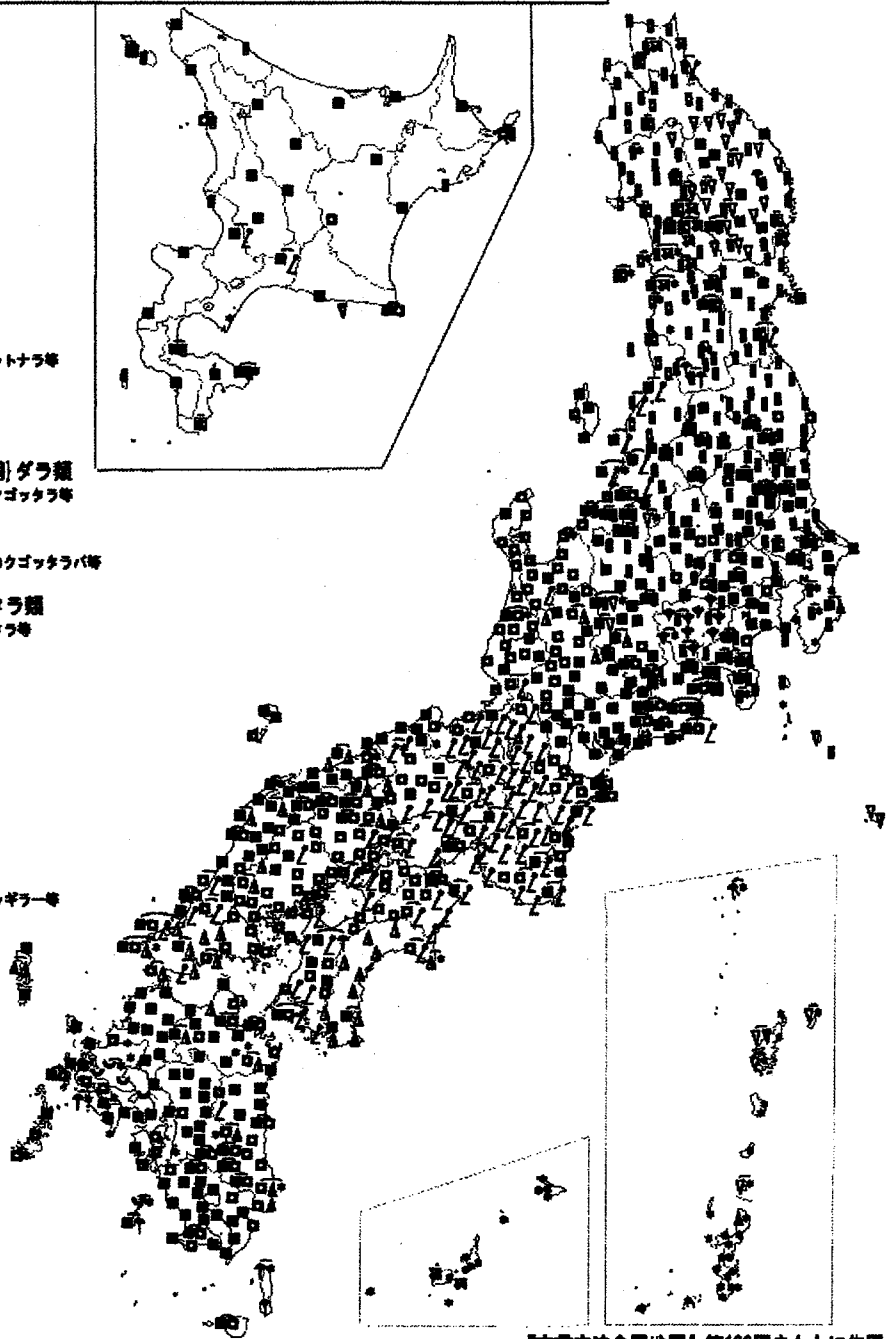
『方言文法全国地図』第225図をもとに作図

(6) 225 図「そっちへ行ってはいけない」(假定条件文・後件：禁止表現・慣用的表現)

假定条件文で、後件が禁止表現。近畿から四国北東部にかけて「イッタラ類」、それをはさむように、東北・関東・中部と、中国・四国南西部・九州北東部に「イッテワ」とその融合形の「イッチャー類」、また東北には「イッテ」も分布し、周囲的分布をなしている。また、北東北には「イケバ類」、九州南西部には「イクト類」がまとまって見られる。

7. 手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ

- ▲ カケバ類
カケバ・ハキバヤ
- ▲ カキヤー類
カキヤー・カキヤ
- ▽ カカバ類
カカバ・カガバ等
- ▽ カクバ類
カクバ・カクボ等
- カクナラ類
カクナラ・カクナラ等
- カクンナラ類
カクンナラ・カクンナラ・カクンナラ等
- カクダラ類
カクダラ・カクダラ等
- カク [準体助詞/形式名詞] ダラ類
カクダラ・カクダラ・カクダラ等
- カクンダ(ラ)バ類
カクンダバ・カクダバ・カクダバ等
- ∠ カクン[ダ/ジャ/ヤ]ッター類
カクンダッター・カクンヤッター等
- ✕ カクカラ類
カクカラ・ハクカラ等
- † カクトキ類
カクトキヤー・カクトギ等
- ✕ カクジャー類
カクジャ・カクジャー等
- カクギー類
カクギー・カクギニー・カクギラー等
- ・ 上記以外
- △ 無回答



『方言文法全国地図』第133図をもとに作図

(7) 133 図「手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ」(假定条件文・判断の假定)

相手の意向を受けるなどして、前件の事態が成立することが真であると假定する判断の假定条件文で、後件は依頼表現。「カクナラ類」「カクンナラ類」は、関東・中部と四国・九州に分布する。東北には、「ナラ」と同じく断定の助動詞に由来する「ダラ」「ダバ」と各地特有の準体助詞・形式名詞を用いた多様な形が見られる。近畿は「カクンヤッター類」で、やはり周圈的分布をなしている。

また、古代語の代表的假定表現形式である「未然形+バ」の形である「カカバ」が現れる。岩手県にまとまって分布するほか、長野県秋山郷・開田・奈川、三宅島、八丈島、鹿児島県奄美大島・喜界島・与論島に見られる。岩手県盛岡市方言の例文を挙げる。

○ エッコ タデラバ ヒッコ アダルドゴ インダ。

(家を建てるなら日の当たる所がいい。) [盛岡市・1920 生・女性]

ただし、古代語の「未然形+バ」が、広く仮定条件全般を担う形式であったのに対し、現代方言の「未然形+バ」は、共通語の「なら」の意味にあたる、判断の仮定を表す用法(133 図)に限られる傾向がある。なお、東北北部に(原因・理由ではなく)仮定条件を表す「カラ」という形があるが、これも、形容詞の未然形語尾が独立した形式と見られる。

以上の図に見られる語形と分布を、きわめて概略的にまとめると、次のようになる。

地域 調査文	東北北部	東北南部	関東・中部	近畿・四国北東部	中国・四国南西部・九州北東部	九州南西部	沖縄本島首里
書けば	カケバ	カケバ カクト	カケバ カキヤー	カイタラ	カキヤー ※1	カケバ	カケー
降れば	フレバ	フレバ フルト	フレバ フリヤー	フッタラ	フリヤー ※2	フレバ	フレー
降ったら	フッタラ フレバ	フッタラ フルト	フッタラ フリヤー	フッタラ	フッタラ フリヤー ※3	フレバ	フィネー
行くと	イケバ	イクト	イクト ※4	イクト イッタラ	イクト ※5	イクト イケバ	イチーネー
行ったら	イッタッ イッタバ ※6	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ ※7	イッタラ ※8	ンジャレー
行つては	イケバ	イッテ	イッチャー	イッタラ	イッチャー ※9	イクト	ンジェー
書くなら →(Nは 準体助詞・ 形式名詞)	カクNダラ カカバ ※10	カクNダラ ※11	カクナラ カクNナラ カクダラ カクNダラ ※12	カクNヤッタラ	カクナラ カクNナラ ※13	カクナラ カクNナラ	カチュラー

他に、地点数は少ないがある程度まとまった分布をなす語形に※1～12 のようなものがある。※1 カクト, カクナラ, カクギー(佐賀, 以下同) ※2 フルナラ, フッギー ※3 フルナラ, フッギー ※4 イキヤー, イクトサイガ(愛知) ※5 イクギー ※6 イッタレバ ※7 イタギー ※8 イッタレバ ※9 イクギー ※10 カクカラ ※11 カクトキ(山形) ※12 カクジャー(山梨) ※13 カキヤー(高知等), カクギー

これらの地図で見ると、中部(愛知等)の「トサイガ」、九州(佐賀等)の「ギー」などがあるものの、方言特有の形式はあまり多くない。むしろ目立つのは、共通語で類義関係にある「バ」「ト」「タラ」「ナラ」などの形式が、1枚の地図(同一の調査文に対する回答)の中に、それぞれ固有の地理的領域を持って分布している点である。ここからは、共通語と同じ形式でも、方言によって、カバーする用法の範囲や、構文的・意味的制限のありようが異なることがうかがわれる。さらに地域別に見ると、東北北部では「バ」が、近畿から四国にかけての地域では「タラ」が、それぞれ広い用法で用いられているなど、各地方言の体系の一面がうかがわれる。

4. 個別方言における仮定条件表現の体系の例1

個別方言における仮定条件表現の体系の一例として、「バ」が広く用いられる東北北部方言の中から、青森県津軽方言を取り上げる。この方言の順接仮定条件形式には「バ」「タラ」、共通語の「なら」に対応する「ダバ」「ダラ」、もっぱら事実的用法で用いられる「タキヤ」がある。

「バ」は、仮定条件文、反事実的条件文、一般条件文に用いられるという点では共通語の「ば」と同様である(例文は、浪岡町生育青森市在住の1931年生の女性による)。

- ① アシ タイフ クレバ ガッコ ヤスミニ ナルベナー。

(明日台風が来れば、学校は休みになるだろうな。) ≒167 図

- ② モット ハヤグ オギレバ エシテアッタ。(もっと早く起きればよかった。) ≒128 図

- ③ イチサ イチ タヘバ ニニ ナル。ホッタラモノモ シラネァノガ。

(1に1を足せば2になる。そんなことも知らないのか。)[一般条件文]

一方、後件が「反期待性」を持つと見なされる内容で、文全体が「回避の必要性」や「禁止」といった伝達的意味を担う場合、共通語では「ば」が使えないとされるが、津軽方言では「バ」が次のようにごく普通に使われる。

- ④ [お前が行くのか？ 心配だなあ、という気持ちで]

オメ エゲバ ハナシ キマネジャ。(お前が行くと話しが決まらないよ) ≒169 図

- ⑤ ソッタラダ クレァトコデ ホン ヨメバ マナグ ワルグ スヨー。

(そんな暗いところで本を読んだら、目を悪くするよ。)

- ⑥ [子どもに注意を与えて]

ソッチサ エゲバ マネヨ。(そっちへ行っちゃいけないよ。) ≒225 図

この点に関して、津軽方言では、共通語で働いている語用論的な制約が効いていない。

「バ」が使えないのは、前件が意志的動作で文末が命令、依頼などのはたらきかけの表現のときである。この場合は「タラ」が使われる。この点は共通語にも同様の文末制限がある。

- ⑦ ママ クタラ (×ケバ) ハ ミカ° ケ。(ご飯を食べたら歯をみがけ。)

- ⑧ エギサ チダラ (×チゲバ) デンワ シテケヘ。(駅に着いたら電話してくれ。)

しかし、このような制限がある場合を除いては、「バ」が優先的に使われる。仮定的な意味が含まれている条件文には基本的に「バ」を使い、「タラ」は、前件の完了後後件の事態が生起する、という継起的な意味が明らかな場合に限って用いる、という基本的な使い分けがうかがわれる。

さらに共通語の「たら」は事実的用法を持つが、津軽方言ではこの場合、「タキャ」が用いられる。

- ⑨ ジカン マチカ° テ エツタキャ オワテタジャ。

(時間を間違えて行ったら、[もう会はず]終わっていたよ。) ≒170 図

以上のように、津軽方言では、共通語と対照して、「バ」の用法が広く、「タラ」の使用が限られる傾向にある。

5. 個別方言における仮定条件表現の体系の例2

次にもう一つの例として、方言特有形式「ギー」を用いる佐賀県方言を取り上げる。県内でも地域差があるが、主たる順接仮定条件形式は「ギー」と「ナイバ」であり、その他「バ」が、当為表現に限定して用いられる(例：行カンバナラン(行かなければならない)：佐賀市)。

「ギー」は、主として佐賀県とその隣接地域のみに見られる形式である。用法には地域差があるが、最も特徴なのは、共通語の「ば」「と」「たら」「ては」の用法のほぼ全体に加え、「な

ら」の領域までカバーしている点である。

ここでは、「ギー」が最も広い意味で用いられる地点の一つである、佐賀県鹿島市古枝字下古枝（地名は調査時）の、『方言文法全国地図』（GAJ）における回答を中心に挙げる。『方言文法全国地図』で調査を行っていない用法については、『方言文法全国地図』準備調査（preGAJ, 1977年実施）の鹿島市山浦大殿分の回答、国立国語研究所編（2008）『方言談話データベース日本のふるさとことば集成 19』（JDD）所収の佐賀市久保泉町上和泉草場の談話によって補う。（GAJ, preGAJ の用例は、注目箇所以外は調査文のまま）

「ギー」（とその変異形）は広く、仮定条件文、反事実的条件文、一般条件、反復習慣用法にわたって用いられる。

- ⑩ あした雨が フッギニャー／フッギナイ（降れば） 船は出ないだろう。《仮定条件文》
(GAJ167 図, 鹿島市 1920m)

- ⑪ きの手紙を カクギ（書けば）よかった。《反事実的条件文》（GAJ128 図, 鹿島市 1920m）

- ⑫ コノ デクッギ モー シゴター デケンモン。《一般条件文》

（〔お嫁さんに〕子どもができれば、もう仕事はできないもの。）（JDD30C, 佐賀市 1895m）

- ⑬ アーワイガチャー イクギー／イクギニャー（あの人の家に行くと）

いつもごちそうしてくれる。《反復習慣》（preGAJ152, 鹿島市 1917m）

後件が「反期待性」を持ち、文全体が「回避の必要性」「禁止」の意味を担う文や、前件が意志的動作で文末が命令、依頼などのはたらきかけの表現のとき（いずれも共通語では「ば」が使えない）でも使われる。

- ⑭ おまえが イクギタウ（行くと） その話はだめになりそうだ。（GAJ169 図, 鹿島市 1920m）

- ⑮ そっちへ イッギ ユーナカ（行ってはいけない）。（GAJ225 図, 鹿島市 1920m）

- ⑯ マチー イッギー／イッギニャー（町に行ったら） 酒を買って来てくれ。

(preGAJ152, 鹿島市 1917m)

事実的用法では、「タギー」の形で用いられる。

- ⑰ ワイガ イタギー（私が行ったら） もう会は終わっていた。（preGAJ153, 鹿島市 1917m）

以上のように、「ギー」は、共通語の「ば」「と」「たら」「ては」の用法を広く覆っているが、それに加え、次のように、共通語の「なら」による仮定条件文でも用いられる。

- ⑱ 手紙を カクギニャー（書くなら） 字をきれいに書いてくれ。（GAJ133 図, 鹿島市 1920m）

前々ページの表からも読み取れるように、全国の多くの方言では、共通語の「ば」「と」「たら」「ては」が担う意味領域については、それぞれの方言ごとに区分の違いはあるものの、その間で共通の形式が現れることがある。しかし、「なら」が表す意味領域についてだけは、いずれの方言においても、それらとは違った形式が当てられている（近畿・四国北東部方言では「タラ」が広く用いられるが、「なら」に対応して現れるのは「のだ」相当形式を含んだ形であり、他とは異なっている。）このことは、ナラ条件文の持つ文法的性質と関わるものと見られ、それ自体興味深い。佐賀県方言の「ギー」はその枠組みを外れることになり、条件表現の体系を考える上で注目される。

ところで「ギー」の用法には、県内でも地域差・年齢差がある。鹿島市を含む佐賀西部地域（と隣接する島原半島北部）では広い用法で用いられるが、佐賀市などの佐賀東部地域（と隣接する福岡県筑後地方）では用法が限られる。北部の唐津地域では形式自体があまり用いられない。『方言文法全国地図』の調査によると、「なら」の領域まで「ギー」が使われるのは佐賀西部地域（多久市、鹿島市、伊万里市）であり、佐賀東部地域（佐賀市、神埼郡三瀬村）では、この場合、次のように「ナイバ」が用いられる。

① 手紙を カクナイバ（書くなら） 字をきれいに書いてくれ。

（GAJ133 図、佐賀市鍋島町蛸久 1916m）

しかし現在の若年層では、佐賀東部方言でも、この場合に「ギー」が使用されるようになってきており、話者にも「ナイバ」は古く、「ギー」が新しい形式であるという意識があるという。

② テガミオ カクギー キレーニ カカンネ。（佐賀市、20 代 m）※小西いずみ氏の教示による

ここから、「ギー」の発生と展開について、地理的には、佐賀県西部地域で発生し、東部地域に広がったこと、意味的には、「ば」「と」「たら」の領域を担うものとして発生し、「なら」の領域にまで広がったこと、その変化は比較的最近のものであること、が推測される。「ギー」の語源は、限定の副助詞「きり」であるとされるが、そのことを含め、この形式の発生と展開の経緯について明らかにすることは、方言の条件表現の体系の多様性を考える上での一つのポイントになるものと思われる。

6. 方言の条件表現に見られる傾向

全国方言を見渡すと、津軽方言、佐賀方言を含むほとんどの方言において、条件表現を担う形式の数も意味用法の区別も、共通語に比べて少ないことに気づく。条件表現が、順接仮定条件という前件と後件の論理的関係を担う文法要素であることを考え合わせると、このような表現は、書きことばを背景に持つ首都方言および共通語において分化発達する必要がある、専ら話しことばである方言では、未分化未発達、または整理統合に向かった、という見方ができるだろうか。別の表現分野での状況を踏まえながら考えてみたい。

7. 方言の文法体系の多様性の記述に向けて

方言の仮定条件表現については、共時的に(1)形式のバリエーションと分布の把握、(2)特定の形式の意味用法の記述、(3)特定の方言の体系の記述を行うとともに、その上に立って、各地の形式と体系を比較対照し（対照研究・類型論的研究）変化を跡づける（言語変化研究）、という課題がある。そのためには、現代語研究、歴史的研究、そして方言の記述研究の成果を生かして、条件表現の体系を描き出すために必要な観点を網羅した調査文を作成し、調査を行う必要がある。

そのための調査票は三井(2002)で作成したことがあり、本発表の津軽方言の調査はこの調査票によって行ったものである。しかし、従属節内のテンスの分化など、特に「なら」条件文を担う形式に関する調査文が手薄であるなどの問題点があり、個別方言の記述を進めながら補充を行っていく必要性を感じている。

『方言文法全国地図』には、文法体系の多様性をうかがわせる例が豊富に見出せる。アスペクトや可能表現、一部の格表現のように、記述の枠組みがはっきりしており、諸方言の調査も進んで、研究が進展している分野がある一方、条件表現のように、ある程度の見通しが得られているという段階の分野、間投助詞のように、枠組みの設定の可否自体をこれから検討する必要がある分野など、研究進み具合は様々である。現代語文法研究や日本語史研究と連携しながら、方言文法の対照的・類型論的研究を進めていくことは、今後の方言研究の一つの課題であると考えられる。

【参考文献】

- 金田章宏(2001)『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 神部宏泰(1992)「第3章第2節 肥筑方言の仮定条件接続法」『九州方言の表現論的研究』和泉書院
- 国立国語研究所(1993・1999・2002)『方言文法全国地図 3・4・5』（地図と解説）国立印刷局
- 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 中井精一(2008)「地域言語・方言」『日本語の研究』4-3
- 日本方言研究会(2002)『21世紀の方言学』国書刊行会
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『日本語文法セルフマスターシリーズ7：条件表現』くろしお出版
- 彦坂佳宣(2007)「『方言文法全国地図』の分布と文献国語史との相関」『方言文法全国地図をめぐる』（『日本語学』臨時増刊号）明治書院
- 日高水穂(1999)「秋田方言の仮定表現をめぐる ―バ・タラ・タバ・タッキヤの意味記述と地域的標準語の実態―」『秋田大学教育文化学部紀要』54
- 日高水穂(2003)「条件表現「すれば」「したら」「すると」」野田春美・日高水穂『現代日本語の文法的バリエーションに関する基礎的研究』科学研究費補助金研究成果報告書
- 日高水穂(2006)「地域言語・方言」『日本語の研究』2-3
- 方言文法研究会(2007)『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』科学研究費補助金研究成果報告書
- 前田直子(1995)「ば、と、たら、なら―仮定条件を表す形式―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』くろしお出版
- 藤田勝良(2003)『日本のことばシリーズ41：佐賀県のことば』明治書院
- 三井はるみ(1998)「方言の条件表現 ―『方言談話資料』と『方言文法全国地図』からの研究の可能性―」『国立国語研究所創立50周年研究発表会資料集』
- 三井はるみ(2002)「条件表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』科学研究費補助金研究成果報告書
- 三井はるみ(2002)「気づかない方言の方言学 ―対照方言学的研究の出発点として―」日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会
- 矢島正浩(2006)『近代関西語の順接仮定表現 ―ナラからタラへの交代をめぐる』『日本語科学』19

- ◆ 本発表は、日本語学会2008年度春季大会シンポジウム「日本語の条件表現 ― 体系と多様性をめぐる ―」（2008年5月17日、於：日本大学）における発題「条件表現の地理的変異」（『日本語学会2008年度春季大会予稿集』pp. 51-54）に、加筆、修正を施したものである。